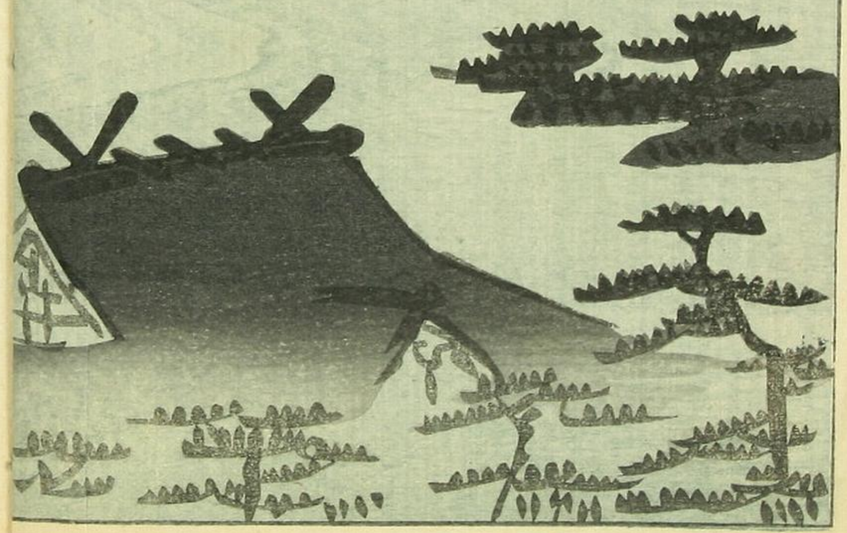
永島孟齋画
三編下
青盛文庫
篠田仙果 綴
三編中
藻汐草近世奇談
三編上

藻汐草近世奇談
三編上

A 460
7

藻汐草近世奇談第三篇上之巻

篠田仙果錄
孟齋芳虎畫
青盛堂壽梓



48-8117

花瓶の木蘭水を増して漸々開き鉢植の丁子枝曲りて色付し
笠亭の扉の外に輾る車乃停滞しに秋葉の原にて近頃流行
自轉車なと想像しに青盛堂の主個にて藻汐草の三編に
未だ出來ぬかと督責に原稿に繪入新聞に箱田千代太大人の
為永流の奇々妙筆其侭移せし土筆摘草などの興に無とも一度に
手にとり御覽の程を伏て願ふといふ者に

浪花の小龍

同知哥

藻汐草近世奇新話三編上之巻

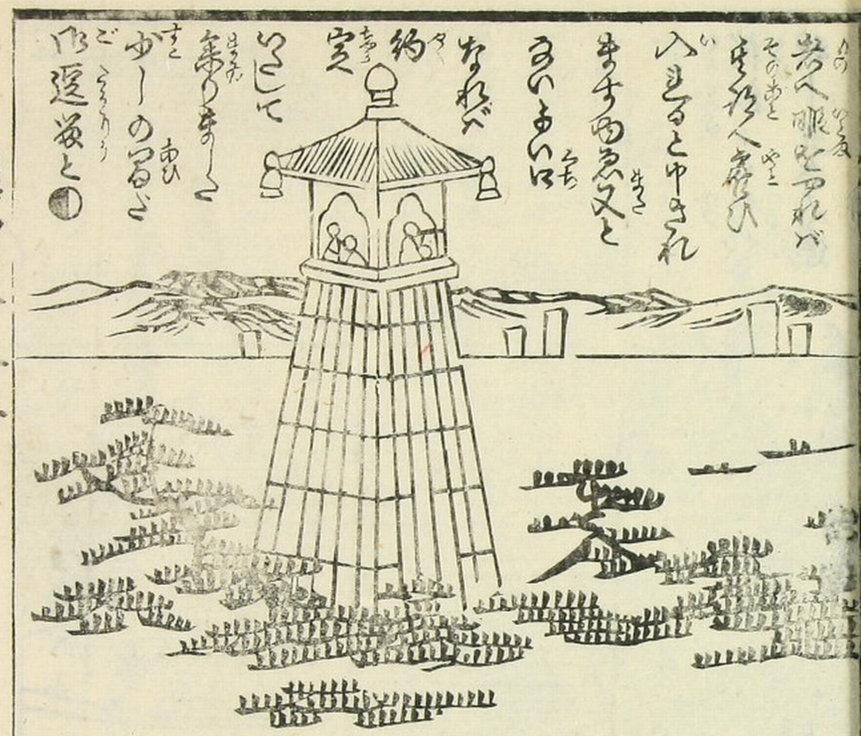
○三府のうちにも大坂ハ船の便利いと宜れば
巨商人殊に多く人家も自然と調達
なれば邑非一ト まうけとせひ附 沢深屋
金ゝ助ハ兼造の案内に大坂堂傳
演通り一丁目の旅人宿丸利方
を旅宿とさゞめ身の落
居を一ト目もそゝと
兼造に
迫りなれば
委細所知致
しましたと ◪

◪
出行しが
立戻り「かほて
お話しゆゑ通り
お前さんの出番量
で一ツうはひ調子に
行ば纏めて 次へ

つぎ 金の掛
まるのへ當所で
盛んの相場に
限れば私しの
祝父が懇意な
米商會社の
所取へ米公の
事を頼んでは
たら當月の
末つゝろ来月
の初旬ゆへ不
都合のある筈は

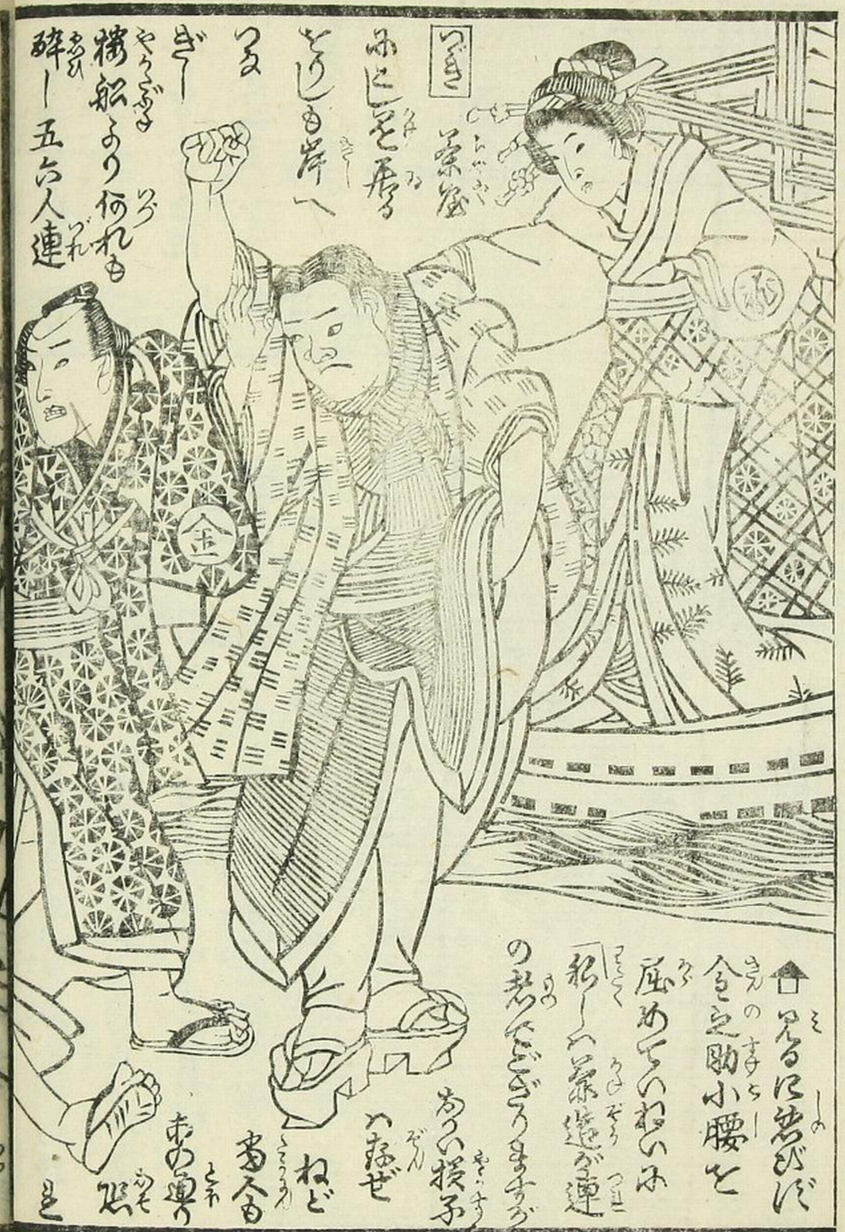
◐ 嘘ゝ実ゝ程よく云ましその
翌日天家もよられば幸ひ
堺の妙雪なに

▲ 本部供答を執行なし
系倫人も出るときけば

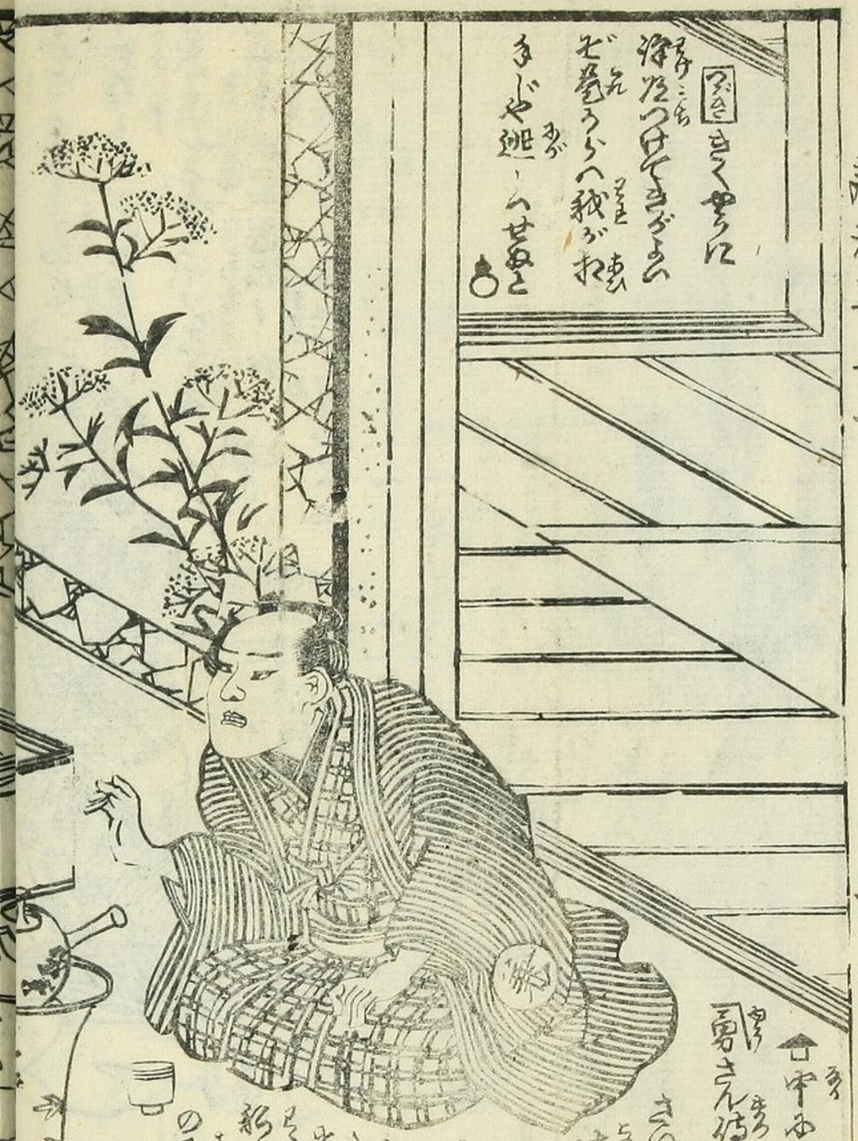


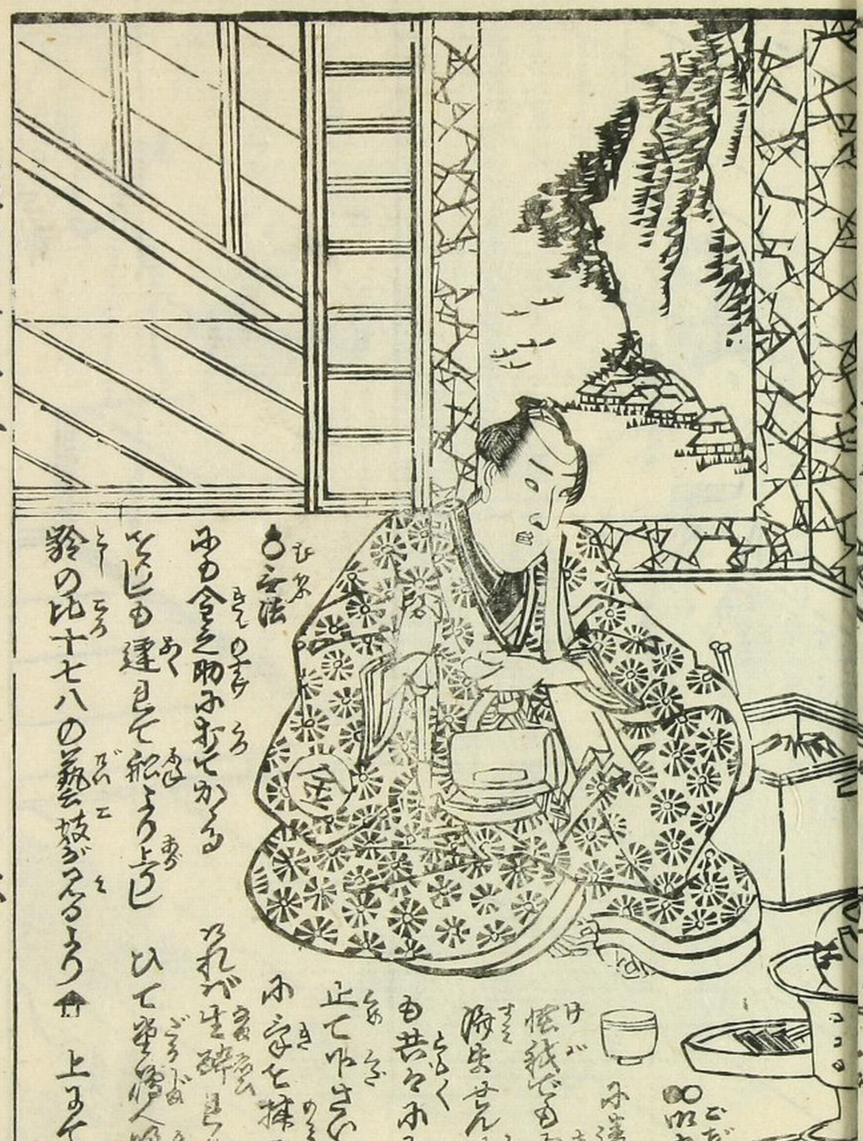
者へ服をつれば
其後へ飛び
入まるとゆきれ
まず西急又と
なりまいに
なれば
約
定
いとして
乗りまして
少しの留ぐ
作選挙と◐

但吉かけて出見物れば此の程に
出覧なされと暴造が進みに
より旅宿を立出長町筋よ
り天下菓屋にて一ぷくは
但吉新家の二文字屋に
て昼食なども其上より
本社へ系倫せしが安しに
まさりし壮厳にて新家
なるあり様に家の行末を
行急は出見の演の家燈
樓にのぼり是を近を出なかめ
燈樓を下り倚へなる 次へ


つゞき
ふにしを居る
とりしも岸へ
つゞ
ぎし
横船より何れも
辞し五六人連
見るに若びに
金之助小腰を
屈めていねいに
「私しは兼造が連
の者でござりますが
あつい投子
はなぜ
ねど
当人も
赤の連り
然

是唄まどろんでひ
来りしが一人の男が
兼造とみて「サア己れは
二年以前逃亡した
兼造じやナよの処で逢ふたはな
何時此地へ帰つて来たるとしへ
一云ひれうつ甘が佐吉
無りいつぶとの奴じやサア
代りて金今ることせずしも
結ぬと胸ぐらとりこづき
せされ兼造も石或牡の子
の有故にや一ト縮えにまり云白も出ず
辞が「コレく若いの
に利な



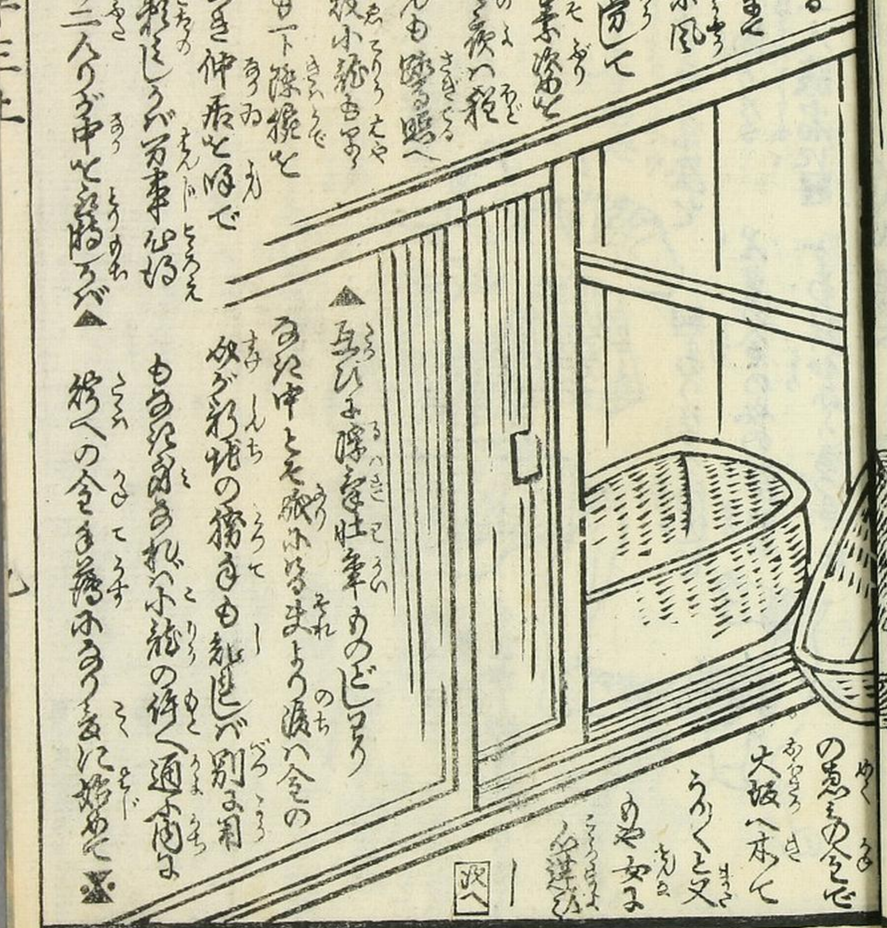


次へ

[つゞき] 小祝を揃て手を揃へ迎ひ
ゑびすの祝ひ初笑と云ふ遊ばせ
を婚礼の式中一ト晩お祝ひ方
ゑびすの彩色を十日の賑ひ
ゑびす奥様へ兼造ゑびす遠慮と押上
伸張ゑびす村彼小祝ゑびす恭
招き入れ祭礼へ参ると勘へ
兼造様は福ゑびすの礼を
のべ彼招福を渡しやせび
き添切をゑびすもろこび
来客の客とゑびす
注連を勧め

▲小祝の付きま板々の来客で
ゑびすもおひ祝ひ
ゑびす様が
実を表ゑ
今年その人
気の祭礼の
終よ
大まへ
の三十四

今の祝の客ゑびす
ゑびす人形よりゑびす気も
きつぷうとしてゑびす風
彩色の方と一ト苦労して
ゑびすとゑびす小祝の装束を
拵ゑ今の祝も衣ゑ祝ひ
よく祭り羽子板も賑へ
ゑびす小祝ゑびす様ゑびす小祝ゑびす
夫とゑびす一下降猿を
ゑびす様ゑびす伸張を祝ひで
ゑびす様ゑびす小祝の仲へ通ゑ
ゑびす密ゑ祝ひ祭礼ゑびす事祝ひ
ゑびすの祝ゑ幕をきり二人ゑびす申を始ねゑび▲



▲ゑびす降臨壮年ののどころ
ゑびす中とゑびす祝ゑびす様ゑびす
ゑびす彩色の物ゑも祝ひび別ゑ用
もゑびすゑびす小祝の仲へ通ゑ
ゑびす様へ

いづき　身の敎訪がひまつと由て案内へ望まれて何時流の出来る程
あらんと新聞通ひを止まりなれば小説いまと知らぬ故夜室夜
夜を選れども唯一ト云の返事もなければ外に
滑稽出来しなかんと字をもつて注意も引
病ひと称して暇をもらひ秘家
の丸利へ居り密に食を安に
あひ暇この数に並に立今
病ひ何でもあつりと心の
底を学ねばならぬと食の安
を無理につき出し心要き業務を
たのゝ酒くらうゝ酒りなる
○安に又兼造に一人旅宿に

○ありなるが侍辺を
見まが食の安の洋茶
があれば心にうまづき

藻汐草近世奇談　初編より　引續出版

松飾徳若譚　六編より　追て出版

今朝の春三組盃　三編より　追て出版

御届
明治十一年十二月十七日
東京地本錦繪問屋
神田區仲町一丁目六番地
編輯人　篠田久次郎
日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人　堤吉兵衛

010190510528

篠田仙果翁

三編中

A460
8

藻汐艸

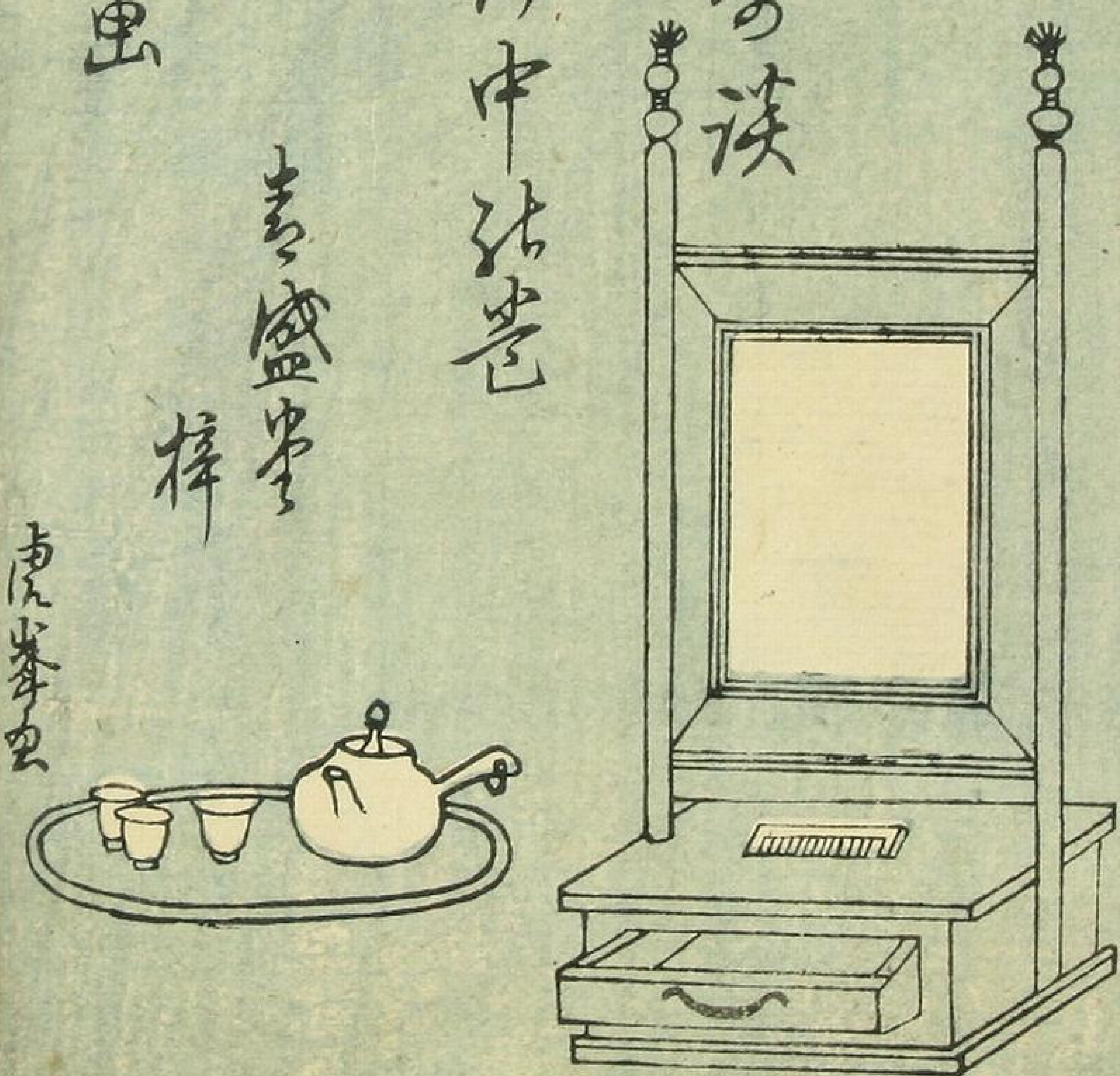
近世奇談

三編中往巻

仙果録

寿盛堂梓

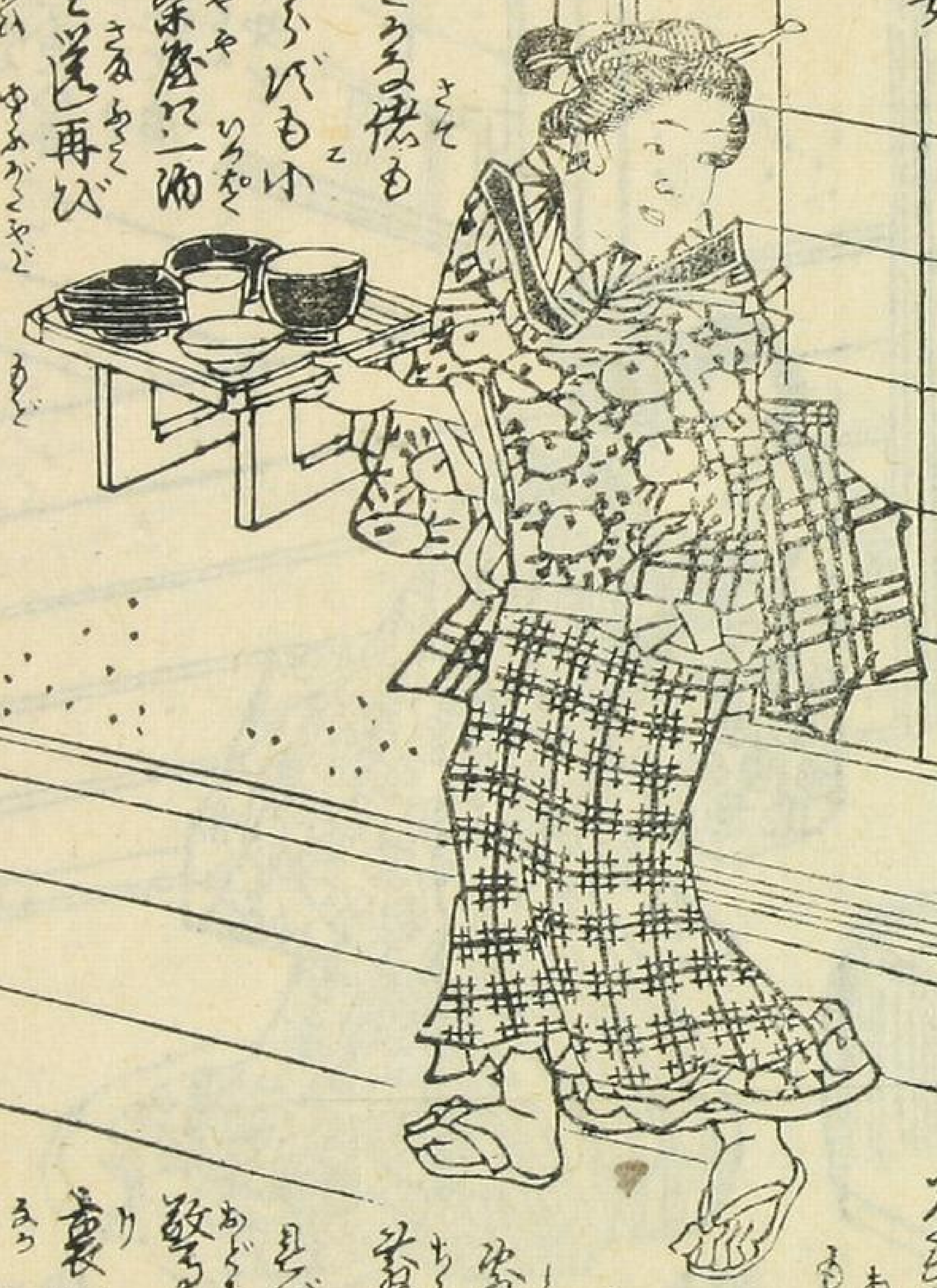
よし虎画



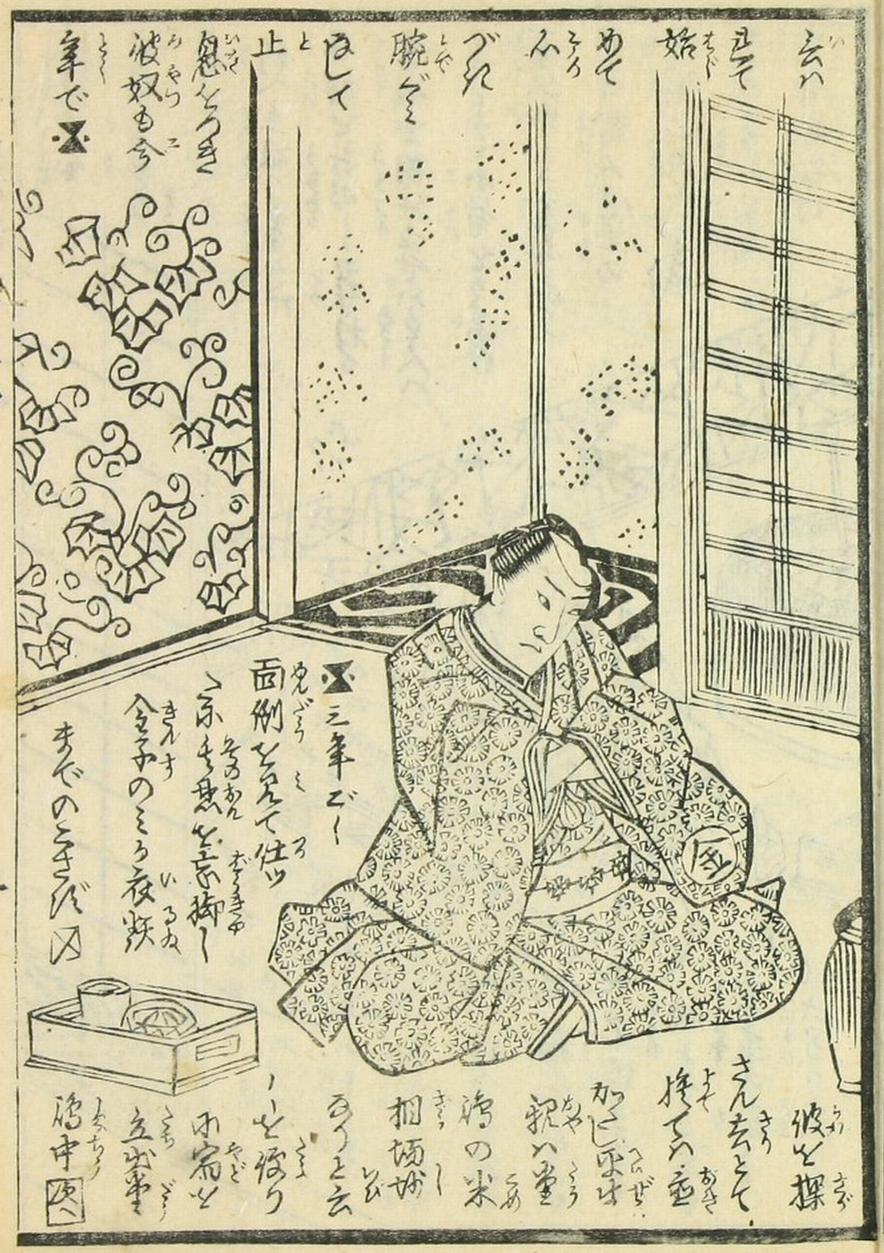
虎峯画

48-8118

○桜ハ花の下ニ枝を折らぬ且
山鳥ハ美容ニ慢じて身を
霞渡すまでも男女
貧顧れぬ家ニ生涯
を経る教訓譚
屋
ー猶ニ遣あらば
鳴呼恐る謹むべき事多猪も
深若含る助ハ家らびも小
就とさに在處ハ茶屋ニ一酒
ー翌日九時沢用を送再び
小就と酒敬ハ近き田ハ文寄富ま戻り⊠



⊠借きりの
座敷ニ入り
大王ばかり戸棚
も明殺し
ふて
小風呂
盆など
蓋して有
且べ大いに
驚き気を
裏を明ふ
中ニハ[illegible]

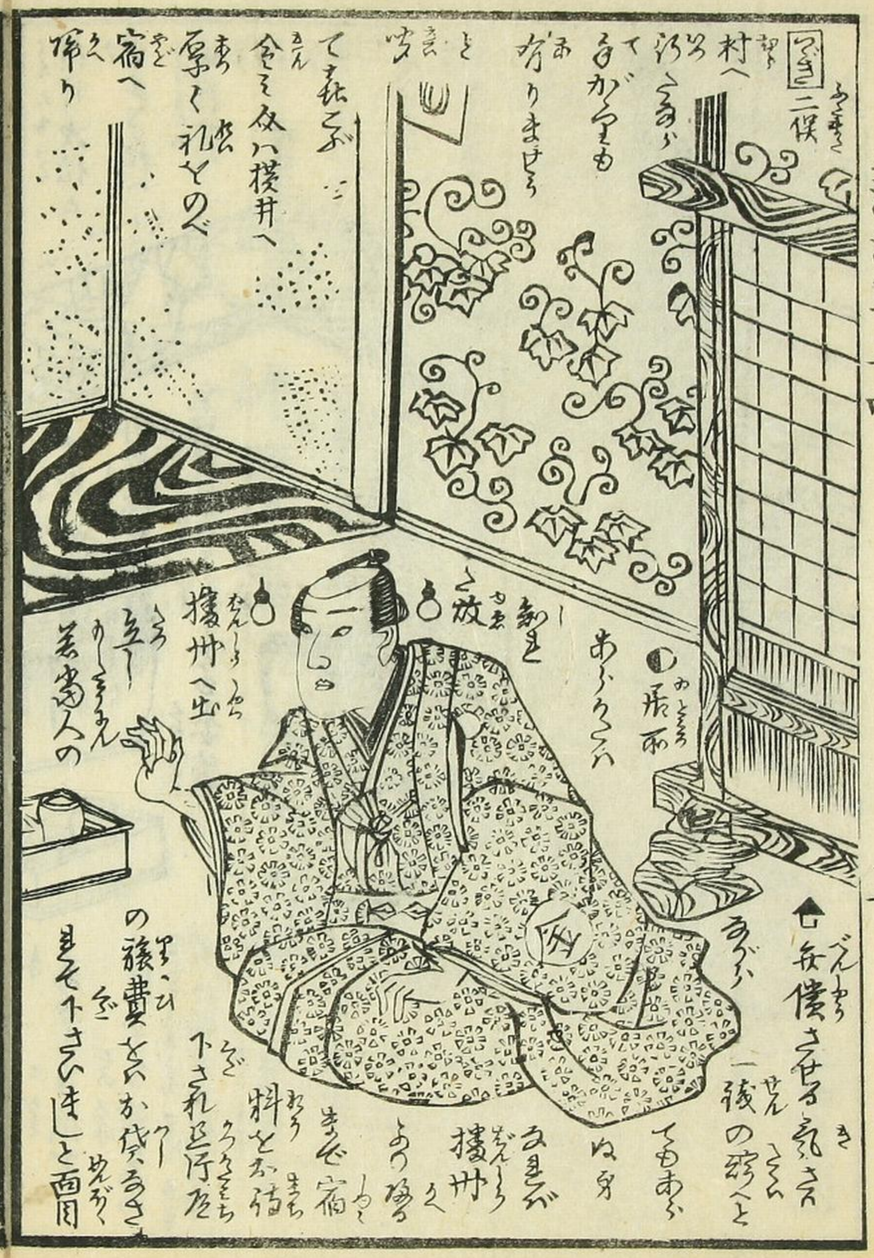


「つぎ」文会
されどそのそう
あくたびくれ丸
利へ五郎つきたて
ふ細をおのし尋ね
方夜を相法をあらん人へ
まづ〳〵小首をうなづき
ふん出し〳〵事がまり
まず那人が宅の
下男を彩んでを紙
やふくれハ菊々
宝寺町谷町

▲那人いそ〳〵と半袴のお物しやへ庭れて勘定を取るを石切がありて順とう二三百来家ふ乗く

撲井次作と
出きこれべ
そのそのみ
生撲井へ
切て
まつすぐ
有ありもせう
とらふよいき
さろかやめて

▲谷町の撲井を穿し事とも妻安
毒ことを紙を
よにこそ詰いあの
男の明友が私の処
ふ売こ放みて
兼造の就と
ふい撲物の
加古川駅
二俣村まで
中谷義人を
ふは下出
もたーふ
あれべ

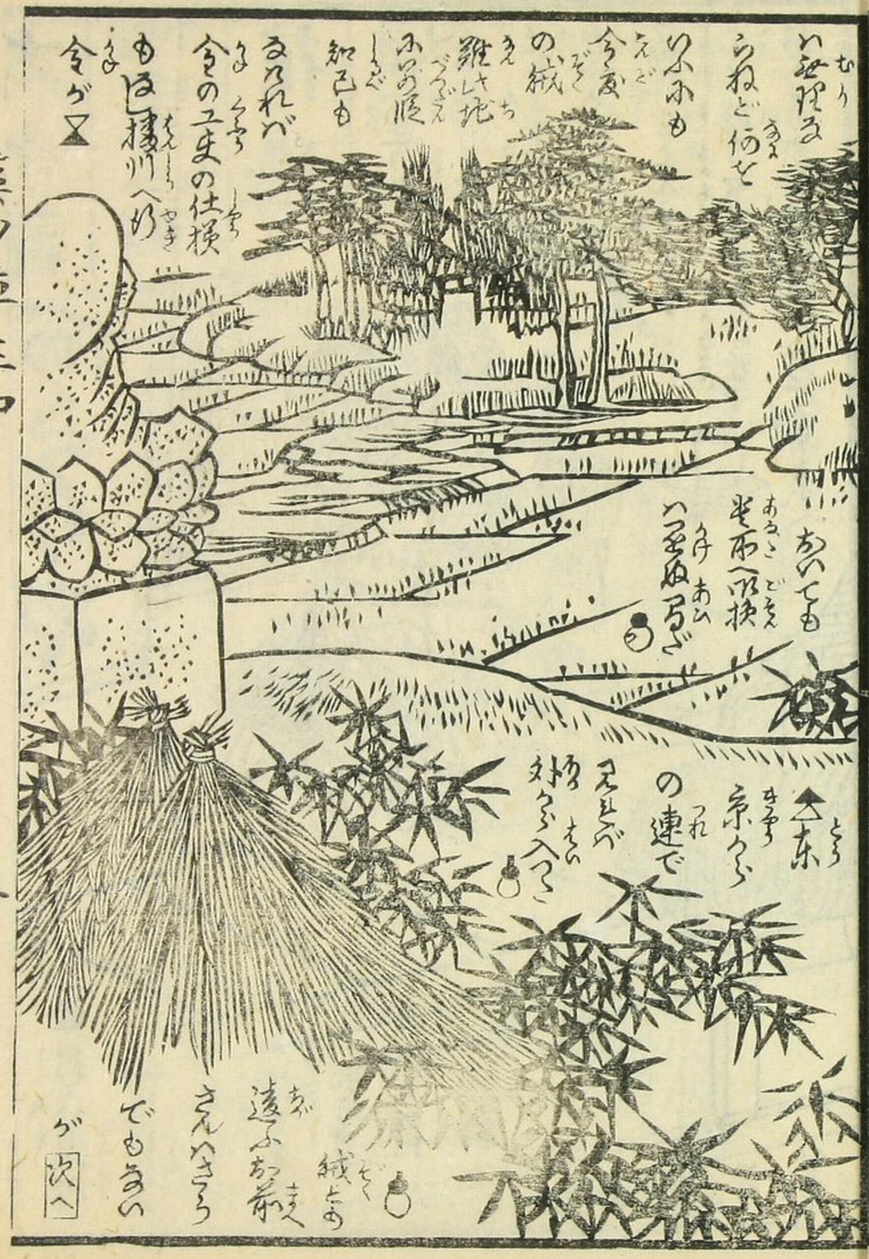

二俣
村へ
手がつまも
かりませう
と
吹
て
食ミ夜ハ横井へ
原く礼をのべ
宿へ
帰り
居所
あらかたハ
放
撫州へ出
立し
若当人の
兵僕させる気さ
一銭の窃へと
てもあら
ぬ身
撫州
より為
まぜ宿
料をお請
下され足行屋
の旅費をハお貸なさ
まそ下さひまし
と両

少しも
いのく
撫州
行んと
ぬ人ど
身に
一銭の
絵へな
れば
丸利への為料のこゝろ旅費の
手当に足張り丸利の為ゆる
に御向ひ藁造の
居ぬと見ハ
飛ぶ足合
ゆけにおのこゝ為丸
利の至人ハ跡を
ゆり「世の角の
お粗そなれど
事なら
出来ません
始めて泊りて
お方なれば
中勤宮を
雨ぢなれど

ふるき
ある日遠ひにて出来びが
事のことを作りて売ホ
何採るものが安にもせよ
猟舟へ折ふしの肴
料いまだもらうえ
ざるみのお客様へ
貸つみふ物生ま成
ト来で買ふうち
挨拶ホ今を改い
つ死ても
忘れまじ

白岩
料を
當時の銭
て下さいト
ひつまう乞めど
ふ

竹ざるを
銭縦



いかほどな
らねどいかと
りふふも
今度
の銭
雑さ地
ふの限
知己も
なれば
今の二文の仕掛
も日播州へ
今ガ又

あいても
老而一羽挟
つまぬるご

東
京ふ
の連で
ごとび
好ふ入つて

遠ふお前
さんへさふ
でもまの
が次へ

太々詞 御定宿 花講

「つぎ」連の者と扱を合せ獨り先へ迄て並て持迯ふあふぎ拵と肩料をふんだ事なも是迄陰分有さる又老公を疑ふ日ふ據訴へ好といつて東京へ

新右衛門町 少て淫深や とゝふたぐ 浪世まて 私の身の うへハ

久ゝ成ん成るゝ生稽も知れなせ成私方 せか立ゝなるなら寄麗ふ動 実なされませ結ひけふ事 ませ成く情なくも所ひ是一旦 後ハ立られど又つぐと考へ是ハ家ゝの云のも むもなり如何ハせんとゝろかひつ悲し愛まれ宜 なるうつ下 身が付しハ此間を持て居る煙草入 煙草ゝるとて二十円余出して家放是なひて 家ゝの並へ笑出し 阿々のお話しを承こなりて私 私をお疑も無理ならねど安して此家を秘す様な 事ハさらく致しません私の親共ハ東京

御定宿 花講

次

つぎ此地で年抱いてさんと
三年越しつゝてゐて
菓造を力らとしやう
とのゑひで来て
甲斐なく飼ひ
犬まで
を哈ま
年をゆ過て
おつかりで今子
のこまらぬ衣類
まで特通されて今度の
仕義者も急ぎ来家へ手紙も

▲宜やうぐろ井ゆ麦ふとゆて
日ゆへ價の貴のへ

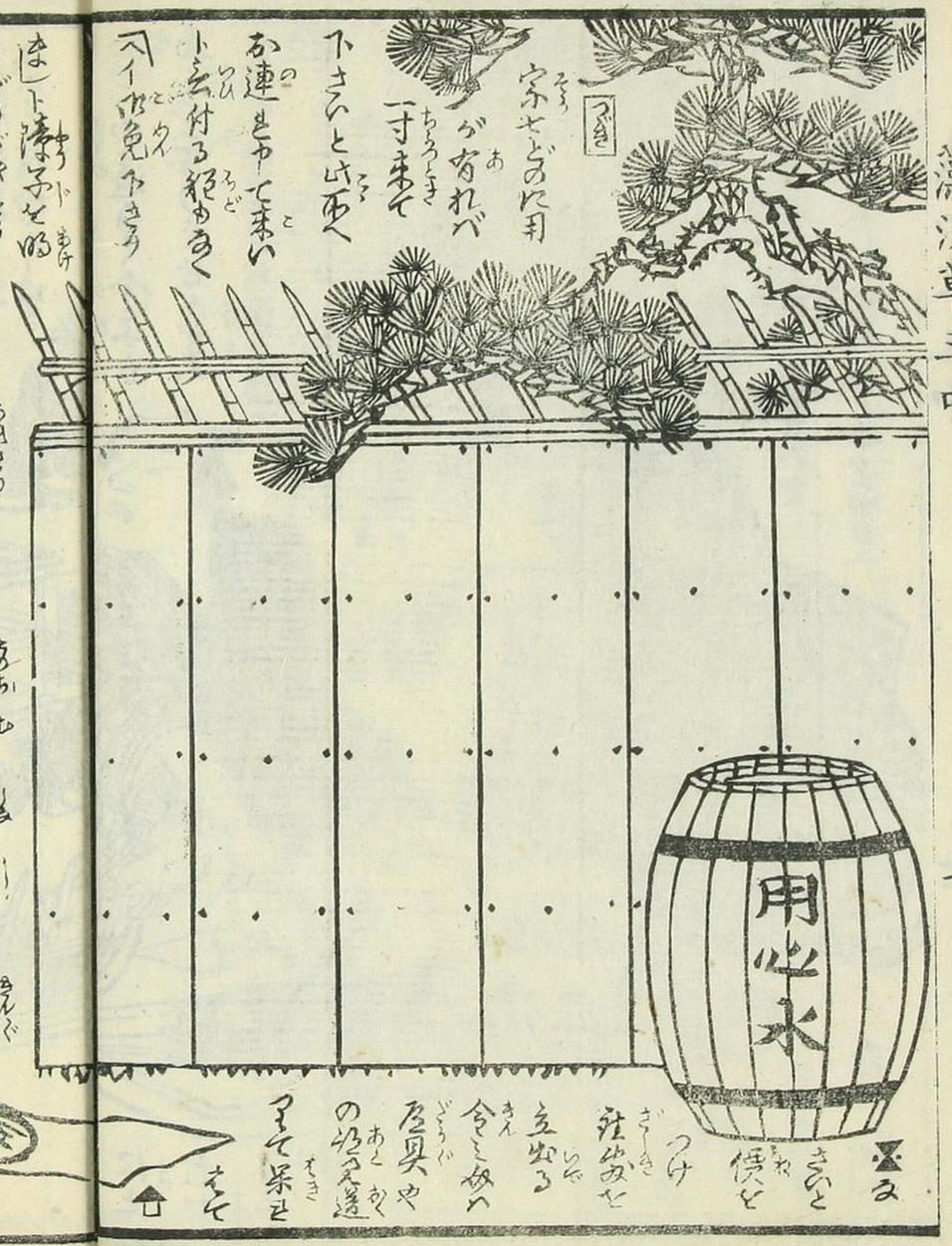
●あくりま人猶ふ
品を給るのは仲旨の親
相で法度なれば麦
往事ふなら家へ
出入の居るぞやが丁途

●店人朱ゑのが
幸ひ生者人麦
相ひ代合で
和し穿の作動
実なきま通とゆへ
まで麦る気はなけ
れど実は身の先
が人と
ゑへば
万事
冥事
ゆう

出せば相違なく今子も
届くでござりませうがま
を待て居りまでは菓造を
捕まへるに附日がかゝまて不都合
なまれば持古しは段まゝが今相緒メ
網愛共性は性なる
不やゑに東京より
今の事るまで低当
に取り接丹へ立しては
下さるまいかとるをかけて
粉こゝる方をは誓く煙草入を
ためつ遣しつ新詠め「どうやらにも

にと
粉む
にん
場手
をこれ
ハイと
来る
下女に
むかひ
「店に
ゐる居奥
屋の

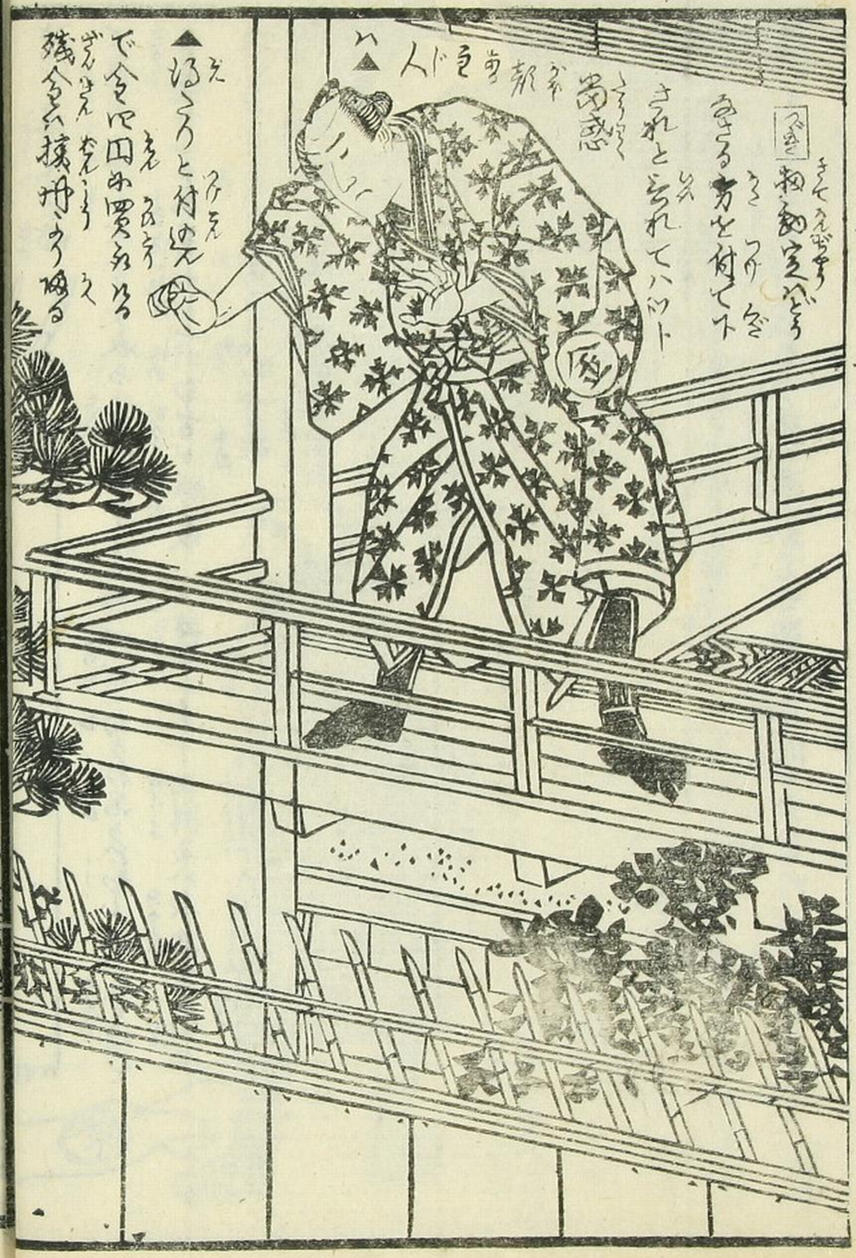
次へ



ほ」ト陸子を明
て居具屋宗七金を以て換投なすに
五個は二タ不見出し「此お方が解義
ないなので見を奏ると作りなる故
引き取候は何位と出せを云へ
金所を付石につけて見て「なる程
嫌く出来てなれど前金物は極悪性
減金で仕上さ仕込みの徒々の金はまやうし
物煙管は銀の石州ぐが大坂では不流行外の
お家でいらずけば二円とは出せ及せぬが事実から
出入の此家のなり故三円までたり込みませうまう
情一ぶいやうに叶はぬなら他の者にお見せ
「此紙へ向うぬ不かは知らねど金銀を
渡しても十円銀には取物を三円
とは何なぞ足元を付込んで
見例出も銀がなるト怒りをふくみ
煙草入を腰に見をも個はいらぬ
「先銀もいふ通り奏うといへば二足之交
連絡が出来ねば奏故すてぐが

次へ

つぎ
宗七どのに用
が有れば
一寸来て
下さいと此所へ
お連もやて来い
ト云付る程もなく
「へイ此免下さう
さいと
候を
つけ
往来を
立出る
金を以ハ
居具や
の御見送
すて呆れ
たて


人▲
[図] 和泉守兼定の
名ある方を付て
されとられてハット
当惑
▲ほろうと付ぬ
で今は四ツ門外の
残念な様子をする

まだとも先あ共
女入まひ給
男あく男ら
女敷ぬ男敷入
待る積りそ
丸利方へ参ら
梅田より汽車にのり神戸より
夜五ツ半後姫路ゆ一汽世
乃宅を歩行～放生をうさめ聖日の午前九時限
ち他る叩まで来しをう御の案内の二階ゆ下せ～
松ヶ下ろくと今ら助の為に為しをとれが丸利の
下し付る夜ぬふえもみて二階をとれら
あ外らんや
江西松のうちをや付て
赤そぶ金と妙 割烹店へ
送入便とを一盃
次へ

新編西國奇談　廿編より　追々出版

薄緑娘志らなみ　八編より　追々出版

娘庭訓黄金の鷄　追々出版

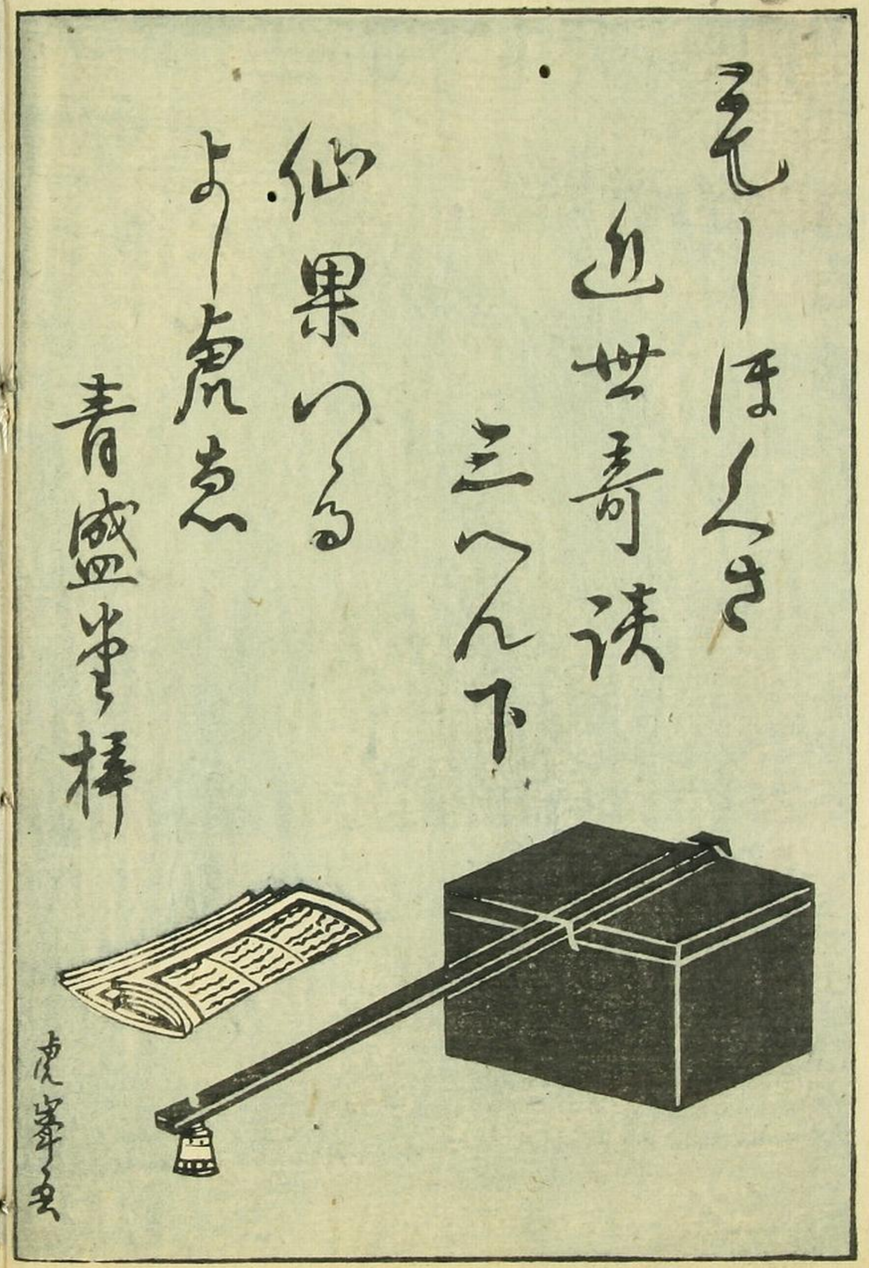
御届
明治十一年十二月十七日
神田區仲町一丁目六番地
編輯人　篠田久次郎
日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人　堤吉兵衛
地本錦繪問屋

010190510536

永島孟齋画
三編下
青盛文庫

A 460
9 c

○可愛い子ゆへ旅とは
短欲も今はあきまし
金こみへきてくと大坂へ
戻りしが便る
べき
方
も
なれば墨
鶴の丸利へ行ふと個は
強欲能屋のもの放金こ助の
さ夜と見て往安へ客か一ぱいて
明こ家が有ませぬ此後お出を▲
▲解い
非と
所なりこまして絵方なく尚家も
臣ホ中の勝地の袋帰の茶迄
◐来しなり国シ遠つこが臣兎
なさい金さんてい有ませんかト聲
かけられて手ノ返へ且い先に
なりく拝具にもほ袋帰の図



48-8119

つき
娘ゆゑ
おちろといふ
藝妓なり
金さんマア
よくまちなさ
小袋さんも宮
をめんて毎日来
君の噂さ付り必定
所用も有来せうか
私の家へお出なさい
トちまてハッと恥らひ
しか相伺るへき分もなけれハおちろ
▲後世はたれと実意のある
者なれハ
及ちす
なるゝ届くよ
流行お世話を
致しますまハ何安心なさ
ト
カらを
付るこゝ処へ小袋ハおちろの紹介

の翔に従ひて略号照方へ伴なはれ
今こゝ助ハ見まぐのみ共
寂くれしくおちろ母子へ
相ぐるおちろの母の
おてると
いふハ貸席の
せをきく行るものも行事へ
次第をきく
娘でハまりますが
うへハなんで
ませう
一ぱい
お世話ハ
志ます
次へ

明神

つゞらせんぬ

つゞら

高麗ゟ止
ぬかと祝
たちも心配
せん足小嬢へも意
とぬへは或日おそるに打向ひ
嬢方はいふ是もなく小祝の添切

金

◎らち明
活しなれ
は「あるな」祝
史も明和
も語人
ゆへ祝ゟ
なれは
小祝
さんと
相談して
本公をなき
見返下ふらく

嬉しなれと東京の嘆へ
祝に安心させ
るため何様
骨ゟ折ずりとも
一ト幸抱いたまれ
バ笑事な家へ絶込ん
で夫を汲に折も申らバ
祝への⧗

辻らら

⧗
絶が殺したしと後を◎

ひふにつけ小祝
にも
ゆふ
させに入角へ
祝しに天祚
橋通り
一丁目の
意候を後
世に出る武
茂久玄米方に
にゝあるといふにより
目見ゆふにおしゝ

次へ

つき　白人の字に入武義方へ位迎ひ
に恭候
を申れ
是人新
月向なく
勅迎ひ
久玄朱も
月をかけて
宜敷ものを垂

☒　日々
不迎
戦ひ

あてたりと化
此日吹聴迎にする
寺年の五月下旬令ミ女ハ風邪の心地と
お伏せしろ枕も上らず雇ひ久玄朱も
医者を招き損子を呼ぶ恋ハ令狭世迎
と云れ一下先者でゆかくと書生をさせる
能ひと小生ひを恵まれて添寄照へ引渡
されハ小龍も驚ろき欠来り宋静ゑ不ら宜
ろらんと今橋の旅人者紙改方へ出保養
に令ミ女を半迎て某も十分手当迎小龍ハ
日々に見弱なるされハ病ひに犯されし今ミ女ハ
不自由なられと小龍の外に使りもなられハ心ゆきさへ☒

汐束を
忘れたつけ
此病字
ていつ何
時たちなく
ならんも行り難
此地某で事是
まてハ小諫の伴へ
使りをせねハ若
ものゆるあるこ
なふ程て呼迎照

次へ

手紙を出さんとする折から我が
嬶ぁそばへと添めつ郵便
箱へ入るさもするおろく小松へ
兄弟共来ろう松えに
丸ちゃ世祝義の
や紙とそそ
金さんみても
おまえと同なれてハッとハ
やぢろ「気前今快なる
と笑の病ひまめるる者もせん
軽率剤して滑稽狂放私ろ共拙ふ
着るもと二つ思ふ多人の実なと

図うんて上
やうと寝対

亀が小松の
をあ栗下
と作が
病気

ろいて滑め来家へ手紙そん出ろ
のさトその場を発ろく紛ひる
さそ十円従ふ汽来家の小松の
待ろう金ろめの名宛さて
金子入のま紙一通巻
浜方へ届きられいおて
るハそ菊寺さゆき紙
を封て紙改へ事り金
ろ妙ふ滑世ろけ打
小松も来合せて
手紙ふ円をつけ
をれやうに私ろ図

五円の金を送り
給世越なきれ
い小松いろもあ
新父ろ
ろせ
ぞ角
私のこ
ゆ志
ふ
入ら角
のハ
図ハ

▼此仮名ばかりの五十六字を
今日の祝のまじ
ないとして
うつし給へ▲

▲切り来ると祝
引きいる事の小謡の詞へ
次第の次で今日と

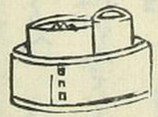
つき ーヨそれど祝の
許へてうこお出さ
と□
□人を
ささーて
いろはーこ
女の処へ参ぶとか
俄まり客まづい今きんざ仁の狂活
ちゞみてもおまへのせろい洒落なるう
今きい来来へ出ろへーそおーまいとさ
ささき江戸ぶを今ここみおもろの二個がろざ
めんでも少いとそ「今文仁のとおの外でも▼

東京の小按方ようてござきーろ 次へ

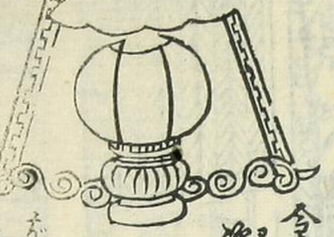
□郵便局へ
歩させ参さるくふいをとの父を日いてえ
戻りなるが夫より小銭お届をとの入え紙政
方へてやうを生と表お紀をれ給ひもごんいき

西京新聞支局

つぎ 私でもおぼしと宵きまし処金ミ女の ◐ちりさくお
病官をうけ又小説へ今ミ女を原くなせい うり情人が
をまさるし私しまりも此れを深くやし上まると さういふ
るをかゝる文云まれどしつと 義理
に理私もんもこゝく 知らぬ
おつゝ人を立 あらぬ
ごゝに為庶 方にも為
はしさ小妹の 撰があると人の
多ゝるも 名がるままけものオコ
あつく様らい いと今ミ女の ぜの音者
ある前にて寸々に女を引さき大弁の に礼はせるう
中へおこゝる先ゝりして何うにつけ小妹の らを合く

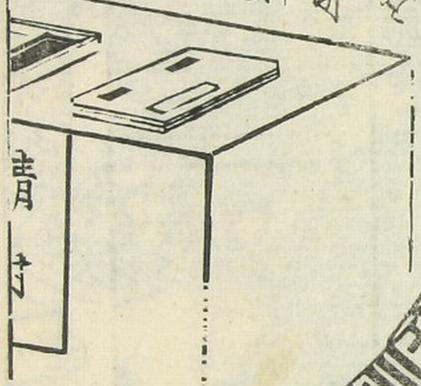


▲自



車のミ云出し口吉の役局あらざれば あいそをつる世ゝあへば
今ミ女もこゝ人あれど殿り 胸も◐
縁のから夜女と影に考
るもあり生内遊々
病きもふはれば一こんさの
ぞを退くんと小説かてるに御談し
六月下旬 病あげ返紙政方を
引抜ひ庭はれいを抜き内本町
四十目二十歳地西京新宮の支
局にて死達人の時があれば これ
幸ひと抜ミ入日々新宮の死達
し小説のしつとにまぐり世ちば▲

私の親を立て
おくれと
このむに
えらうと
音者
は今ミ
女方へ切
小説の新
をつぶして
ちらは病
中立替て
茶礼に筆ひ



次へ

○雑司ヶ谷の墓地へ参詣して

お四ツ「どこそこまでを
あてい今までつゞしてゐた初も
あの泥とあるそらん
とのわるそれが
如き
さの扱
き
ふまさま

○今更
ちんとろ
犯人
仕ひ不審とハ
ぎ

五十円ハいま今清次郎が
てゐる方の正つで不審があると時
しるを暴云ゐ今ゝ妙な荷をかげ
を「犯人」と云ゝまつも今返ゐつ
ゐ業ゞとろ〳〵と考へてゐる
ゐ方へ吸ーてあけがゐ能きん叱ゐ
消云ーて下さいと言ゐを返ーて
ゐ今ゝ妙な紀照へ行ゐてる不安
細を語ーられば「主経のまゐあゐば

○今更
ちんとろ
犯人
仕ひ不審とハ
ぎ

つゞき 日々怠りなく勤め
居しが或日東京より
全く助の朋友が尋ね
互ひに無事の挨拶
して後にその朋友が
「和蘇が此地へ来ふまで
なく苦労をしたのを
祝ひが知り藝者の小孫
と夫婦にせんと是を合されば
先方も和蘇夫故私しが逆ひに
来ると申てよろこぶ全く此「あら
一ト幸抱いたこと人東京へ戻りまれば

◐ 雲打ハ見しくトヲをかて云なれば
友ぐちも取りしが全く此ハ以前
にまさりまさく雲夜精勤し
諸人の重顧を
とけ
居り
とぞ
めぐさ
し
くく

篠田仙果綴
孟齋芳虎画

繪本太豊記 三編

隅田川月梅若 四編

太閤記切附本 品々

郡々逸なぞ切付

御届
明治十一年十二月十七日
東京 地本錦繪問屋
神田區仲町一丁目六番地
編輯人 篠田久次郎
日本橋區米沢町一丁目八番地
出版人 堤吉兵衛

010190510544

賀